



特240

799

大協石油株式會社企畫課編

戰<sup>25</sup>争と石油

始





特240  
799

序



鐵と石油と民族の血と、此の三つは近代戦争における不可缺の要素である。此の三要素を量  
質共に優し備へたる國家のみがよく最後の勝利を得ると稱して差支へないのである。就中民族  
の血の特に優れたるものは、他の條件の不利を克服して敵を撃碎し得る。即ち民族の精神力は  
結局最後の勝利を獲得すべき絶対條件である。これは百戦不敗の皇國の、み民われら一億が火  
の玉となつて國難に殉する一死盡忠の精神においては申すまでもなし、ユダヤ人を放逐して血  
の純潔を保ち得たるゲルマン民族ですら如何に各國人種寄合の殖民軍を前線にたてたる英軍  
各所に壓制しつゝあるかを見ても論議の餘地ないところである。

結局物の量のみを以つて勝利の机上計算をなす米英の嗤ふべき作戦にすら對抗し得ないこと  
なるであらう。大和魂のみを以つてしては戦争はできない。特に消耗戦と稱せらるる近代戦争  
にあつては、國家の總力は擧げて戦争のために注ぎ込まれねばならぬ。就中石油は戦争の動脈





である、石油なくしてはすべてのものが停止する。戦争の停止は即ち敗北を意味する。

されば戦争のために石油が争奪せられ、石油のために又戦争が戦はれる——戦争のための石油は又石油のための戦争ともなる。一油田を繞つて今迄に如何に多くの黄金と生命とが犠牲に供せられたか、石油の一滴は血の一滴とまで云はれるが、その一滴の石油のために貴き血は惜しみなく濺がれて顧みられないのである。敢て過去の物語を求めずとも、現實に石油のための世紀の死闘が全地球上に互つて戦はれて居ることの事實がすべての註釋を黙殺して餘りあるではないか。

石油を有たざる近代國家が如何に屈從的であらねばならなかつたか、之に反し石油を獨占せる國家が今日迄如何に傲然たる國際地位を誇り來つたか、洵に石油の流れこそは近代國家の鼓動である。然も今やこの石油を繞る列強の立場が、各民族の血によつて凄烈にも書き換へられんとして居るのである。第二次歐洲戦争の勃發に伴ふ世界石油問題の歸趨こそは、正に今後の世界史を左右すべき重大意義をもつものと稱しても差支へない所以である。

昭和十七年三月第二次戦捷祝賀の日

## 目次

第一章 帝國の南方油田對策……………	一
一、帝國消費量の飛躍的激増……………	二
二、敵國よりの輸入杜絶……………	四
三、南方油田及び精製設備の破壊……………	八
四、掘鑿及び精製機械の輸入杜絶……………	九
五、輸送能力の不足……………	一〇
六、結 論……………	一五
第二章 歐洲大戰と石油……………	一七
一、戦時消費量の検討……………	一七
二、獨逸の石油對策……………	二二
三、米英の需給問題……………	三三



四、樞軸國と極西アジア油田…………… 四  
五、結 論…………… 四

## 第一章 帝國の南方油田對策

米英を擊碎して以つて大東亞共榮圈の確立のために、帝國の總力を傾くべき秋にあつて、今日迄殆んどその需要の全部を敵國に依存して來たところの石油に關する諸事情を檢討して、以つて百年の大計を樹立することは、刻下の急務でなければならぬ。

本章挿入の第一表、第二表は昭和十四年現在の統計を基準として作成したものであり、大體共榮圈内の自給自足は、今後の原油増産並びに精製能力の擴充によつて可能なるかの如くに考へらるゝのであるが、これ固より平時の消費を對照としての推論故、大東亞戰爭勃發せる今日にあつては、全然豫期せざりし諸情勢の變化に基きこれが再檢討に當らねばならぬ。即ち、

- 一、帝國消費量の飛躍的激増
- 二、敵國よりの輸入杜絶
- 三、南方油田及び精製設備の破壊



#### 四、掘鑿及び精製機械の輸入杜絶 五、輸送能力の不足

是等の事情を詳細に検討するときは、聖戰遂行上の動脈ともいふべき石油問題については、前途極めて多難なるものがあることを痛感させられるのである。然しながら南方油田はすでは皇軍の血と肉によりて、確保せられたのである。残されたる問題はこれを如何に復舊し、如何に開發し、如何に運用するかに存するのであつて、歐洲諸國の如く自らの勢力圏内に入手の途なきものとは全然その事情を異にして居るのである。要するにその困難が如何に大なるものであらうとも、これを克服する方策と氣力とさへあるならば、帝國聖業の前途には洋々たる希望の光が輝くのである。即ち全大東亞海域戡定の今日、更に覺悟を新にして今後の困難と戰つて行かねばならぬ所以である。

### 一、帝國消費量の飛躍的激增

近代機械化戰爭は一面又石油の戰爭であるとさへ云はれる。石油なくしては近代機械化戰爭

は全く不可能であるといふも過言ではない。従つて戰爭に伴ふ石油消費量は飛躍的増加をなす譯であるが、大體近代武裝國家が一度戰爭に捲き込まれるやその國の石油消費量は平時の二倍又はそれ以上に達すると稱せられて居る。

(註) 第二章「歐洲の石油問題」一、「戰時消費量の検討」参照。

帝國の場合と雖も此の公式は適用し得るわけであるが、平時の消費量は固よりこゝに發表する自由を持たぬが故に、戰時消費量亦當然その數字の推定も不可能の譯であるが、大體において平時消費量〇〇萬屯とすれば、現在の必要量はその二倍の〇〇萬屯と見ねばならぬ。この〇〇萬屯の需要の中、假に〇〇萬屯は南方の占領現地において補給可能とするも、尙ほ差引〇〇萬屯の輸入を必要とする譯である。勿論此の内からは國產原油の〇〇萬屯、人造石油、代用燃料の若干が控除される譯であるが、是等の數量は戰時消費の全體から見れば、必ずしも充分の信頼を寄せ得る程度のものではないのである。

(註) 〇〇萬屯の現地補給とは第二表に示したる南方精製設備の活用による軍需要量の一部充足を意味し、その輸送は後述の軍油槽船のみによるものである。

帝國今次の作戰範圍は東西一萬五千軒、南北六千軒、殆んど全半球に及ぶ空前の大規模のも







第二表

東亞共榮圏内石油精製能力一覽表(昭和14年度)

(帝國分ヲ含マズ) (單位バレル)

會社名	所在地	一日處理能力
ビルマ 英緬石油株式會社	ラングーン河畔 タイラウ	2,500
ビルマ石油株式會社	ベユ河畔 シリアム	25,000
印緬石油株式會社	ラングーン河畔 セイギイ	3,500
ク	チンドイン河畔キンダット	300
蘭領東印度 アルゲマイネ石油會社	ジャヴア, クラントン	100
バタフセ石油會社	ボルネオ, バリツクババン	35,000
ク	スマトラ, バンカラン	12,000
ク	スマトラ, ブランダン	18,000
ク	スマトラ, プラジョー	14,000
ク	ジャヴア, セオーブ	2,000
ク	ウオノクローモ	500
和蘭殖民石油會社	ク カボエアン	43,000
ク	スマトラ, ソエンゲイ	500
泰國 シヤム海軍燃料廠	バンコック	500
英領ボルネオ サラワク油田株式會社	サラワク, ルトン	20,000
合計 176,400バレル=25,840瓩 (一日處理能力)		
蘭領印度 124,600バレル ビルマ 31,300ク 泰國 500ク 英領ボルネオ 20,000ク		

七

備考 即チ1ヶ年(320日)處理能力8,200,000瓩程度ナレドモ戰禍ノ影響ニヨリ尠クトモソノ50%ハ破壊又ハ操業停止セラルベク今後全能力ヲ發揮スルニ至ルマデハ相當ノ時日ヲ要スベキモノト認メラル。

註 ルトンノ能力中ニハ荒引装置ノ10,000バレルヲ含ム。

第一表 常時東亞共榮圏石油生産消費一覽表

(帝國分ヲ含マズ)

國別	消費	生産
日本	—	—
滿洲及中華	924,040瓩	
香港	286,280	
佛印	193,550	
泰	254,910	
ビルマ	331,910	1,138,167瓩
マレー	1,167,620	
蘭領東印度	2,375,220	8,740,653
英領ボルネオ	165,230	924,119
フィリッピン	881,660	
モルツカ地方		106,062
合計	6,580,420瓩	10,909,001瓩

六

備考 1. 本調査ハ昭和十四年度ノ各種石油消費量ノ概數ヲ原油ニ換算セルモノナリ。

2. 其ノ後消費量ハ各國共逐年加速度的ニ増加シツツアリ。



### 三、南方油田及び精製設備の破壊

かくて南方石油資源の確保は、帝國としては一日も忽にすべからざる、唯一の血路となつて來たのである。幸ひにしてボルネオ全島の占領戡定も終り、スマトラ（バレンバン、ヂヤムビ、アチュー）の油田と精製設備も皇軍の確保するところとなり、ジャヴァ島も孤立無援、我が攻撃の前に無力のままに露呈せられて、遂に無條件降伏をするに至つた。

然し乍らかりに全資源地帯の確保に成功したとしても、敵國現在の焦土戰術からするならば彼等はその退却に際しては、時間的餘裕の存する限りは徹底的破壊をするであらうから、直ちに戦前の産油量なり、精製能力なりは期待できないのである、現に英領ボルネオ占領直後の議會に於て、政府は右地域において本年中五〇萬屯の採油可能を言明したが、これは戦前の産額約百萬屯の半分に過ぎず、然も同地方は皇軍が比較的容易に占領したところであつて、その後占領したタラカン、バリクパバン等の破壊狀況に比して、損害は遙かに輕微のものゝ如くである。焦土戰術の遑なからしめんが爲めに、落下傘部隊をもつて急襲したスマトラのバレンバン

ですら尙ほ相當の破壊が行はれて居る。

是等の實情から判斷するとき、かりに南方油田の總産額約一千萬屯を完全に確保するとしても、その産額は一先づ半分の五百萬屯には低下するものと覺悟してかゝらねばならぬ。

精製設備の能力合計年約八百萬屯（第二表参照）に對しても同様であつて、その設備の複雑性からするならば、被害程度及び復舊作業の困難は、採油設備のそれに比して遙かに大なるものがある。即ち占領せる製油所が完全にその能力を恢復して大東亞共榮圈の建設に全面的貢獻をなし得るの日は早急には期待できぬのである。

### 四、掘鑿及び精製機械の輸入杜絶

これに對して、至急を要する復舊作業及びそれと併行に進むべき生産の擴充について考へる時、その資材において、人的資源において、内地の生産擴充計畫に支障を及ぼさざることを前提として制約されることであるから、その困難は現に吾人が内地において嘗めて居るより遙かに大なるものがある。資材機器について見ても、戦前米國から輸入した石油精製裝置の金額は



一九三九年には〇〇萬弗であつたものが、翌四〇年にはその四分の一も輸入されなかつたのである。即ち敵側の經濟壓迫は此の方面にまでその魔手をのぼして來たのであつて、昨年に至つては勿論少しも輸入はされて居ない。かゝる状況の下に建設を進めねばならなかつた石油部門の苦痛は尠少のものではない。

資材の不足、工作方面の能力不足等のために、國內に於てすら兎角豫定通りの計畫遂行が困難なる今日、更に遠く南方全區域に於て帝國獨力でその責を負ふて、然かも可及的速かに、建設をなさねばならぬのである。

## 五、輸送能力の不足

ウワールド・ペトロリウム誌の調査によれば、一九三七年現在の世界航洋商船總噸數六・四〇〇萬噸の内九二〇萬噸は油槽船である（此の比率一四％）。ロイド・レジスター一九三九年の發表には、商用油槽船世界總噸數一・六二八隻、一・五八九萬噸とあるが、此のロイドの數字には、繫船又は廢船、及び河用、近海用小型船の多數が含まれて居る筈であるから、實際の

航洋總噸數は結局戦前に於て一・〇〇〇萬噸程度であつたと見てよいであらう。即ちウワールド・ペトロリウムの發表による九二〇萬噸に對し、其後の數年間に若干の新造船を加算したが、更に相當數の撃沈破損せるものを考慮すべきである。

帝國の現状を見るに、一九三九年に於ては、海軍所有の油槽船は〇〇隻〇〇萬噸であつて、當時建造中のものを加へても尙ほ〇〇隻〇〇萬噸に達しない状態にあり、民間所有隻數は當時〇〇隻〇〇萬噸（ロイド・レジスター）で、當時建造計畫中であつた〇隻を加へても尙ほ〇〇隻〇〇萬噸程度である。

（註）帝國の民間總噸數中には勿論圖南丸、日新丸、極洋丸等の特殊船も計算に入れた。

帝國の一・〇〇〇噸以上の航洋船舶總噸數は支那事變直前に於て四百萬噸程度であつて、爾來毎年約四〇萬噸の造船能力を以つてこれが増強に努めて來たのであるが、老朽船の解體その他によつて實際の平均増加噸數は年約二〇萬噸にしか過ぎぬ（第七十九議會政府發表）。

尤も此の一―二年間の造船能率は相當の成績を擧げて居るので現在の商船總噸數は〇〇萬噸を突破して居る筈である。これに對して油槽船が〇〇萬噸とすればその比率は僅かに一―％に過ぎず、全世界の比率一四％に比すれば、その石油の全需要量を殆んど海外に依存して來た帝



國としては實に寒心に堪へざる數字と申すより外にない。

戦前にあつては、此の不足分を敵國米英等の外船のチャーター、トラムバーの利用、又はc ifによつて充足して來たものである。今日になつて今更云ふても致し方ないことではあるが、實に油槽船程米英依存の過誤を犯したことによつて蒙る影響の大きいものは他に類が尠いのである。

大東亞戦争以後は此の〇〇萬噸の油槽船を率ゐて、軍需を充足すると共に國內需要に應ぜねばならぬのみならず、更に共榮圈内の全輸送の責任を負はねばならぬ。然も油槽船はその性質上他の貨客船等と異り、絶対に他品の輸送に役立たず、従つて他船の利用も不可能である。従つて往復共に積荷のあることなく、その輸送能力は他船の半分といふことになる。

(註) 且つて太平洋航路に於て往航に生糸を積み歸航に油を積むべく設計された油槽船が就役したが、これとても通商關係の特殊なる場合にのみ効用を發揮する例外的の船である。平時に於てすら航洋タンカーレイトが極端に不安定の原因の一つはこの非融通性によるところが大きいのであるが、さればとて油槽船の建造に消極的であつてよいといふ理窟は、特に帝國に於ては許されなかつた筈である。

今共榮圈内の石油輸入地域を第一表によつて見ると、滿洲、中國、泰、佛印、フィリッピン其他のみで、原油量に換算して戦前年額約三七八萬屯に及んで居る。是を南方産地の精製設備能力を完全なるものと假定して全部製品として輸送するとしても、尙ほ二六〇萬屯に達する。然かもこれは戦前の數字であるから、將來は更に此の數字を遙かに突破する筈である。

是に加へて帝國今後の輸入必要量は、たとひ軍用の一部を現地補給によつて賄ふとしても尙ほ〇〇萬屯を必要とすることは前述の通りである。

南方石油資源地帯から東京迄の距離平均三・〇〇〇哩、其他の共榮圈内需要地域へは平均約一・五〇〇哩と概算してその輸送能力を計算して見ると次の如くである。

一、油槽船積載總噸數〇〇萬噸、内軍専用で主として現地補給船たるべきもの〇〇萬噸を差引けば約〇〇萬噸である。

一、是に對して交戦區域の特殊事情——不時の滯船、避難又は敵の攻撃による故障等を考慮すれば實際の活動總噸は最大限その八〇%即ち約〇〇萬噸を出でぬ。

A、今東京——南方間三・〇〇〇哩を平均滿載時速一五節、空船時速を一八節(帝國の油槽船はその平均速力において世界一である)とすれば



往航七日、歸航八日半 計一五日半  
往復荷役日數 計五日半

即ち一航海二一日を要する。尤も南方油田附近は概して遠浅で、良港に乏しく沖荷役などの不利があり、これに船員の休養、船體の補修、検査等に要する日数を加算すれば大體月一航海年一二航海となる。〇〇萬噸の船を國內輸入のみに總動員して滿華以下の諸地域を全然無視するとしても一ヶ年の輸送能力は精々〇〇〇萬噸に過ぎない。

B、更に共榮圈内二六〇萬噸の輸送の責任を負ふとすれば、その平均距離一・五〇〇哩であるから一航海所要日數八日半、前後所要日數五日半、計一四日となる。これをAと同様に計算すれば一年約二〇航海となる。

即ち二六〇萬噸の輸送には最低限度一三萬噸の船舶を廻さねばならぬ。従つて此の際帝國向け輸送能力は僅かに〇〇萬噸となるから、これだけでは如何に努力しても最大限度〇〇〇萬噸ぐらゐしか輸送できないことになる。

即ちAの場合にしても、帝國必要量の半分、Bの場合になると僅かに三分の一しか輸送出来ない有様である。然してAの場合などは實際考へられぬ事故、どうしても共榮圈の全責任を負

ふ立場からするならば、尠くとも現在の船では必要量の三分の一しか輸入出来ぬといふのが實情である。今にしてこれが對策を講じなければ、帝國は申すまでもなく、共榮圈の石油問題はパンを眼前に置いて餓死するやうなものとならう。

## 六、結 論

要するに帝國の石油對策は、掘鑿、精製、配給の三部門の總力をあげて南方經營に参加せしめ、しかも三位一體の妙を發揮して速かに皇軍の戰果にこたへなければならぬ。掘鑿部門は既に軍管理下に帝國石油の責任において着々現地計畫の實行に移つては居るが、製油、配給に至つては尙ほその方針も確立せず、國內徒らに机上の論に日を曠うするか、又は排他的利己的の言行に出でたり、又は無爲にして明日にでも大量の輸入によつて石油問題が一舉にして解決するかのように樂觀する者などが横行して居て、これぞといふ建設的意見をきかない。單に油槽船のみの問題でも既に前述のやうな窮狀にあるのである。かりに帝國今後の造船能力を年六〇萬噸としその二〇%を油槽船とするも一ヶ年僅々一二萬噸を増加するに過ぎない。此の間、船



齡超過のもの又は不時の遭難による損失などを考慮に入れれば一ヶ年一〇萬噸の増加も覺束ないわけで、必要能力を完備した油槽船隊を備へる迄には今後尙ほ相當の苦難の歲月を覺悟せねばならぬ。

然し此の造船計畫と併行して、製油部門が速かに現地に進出し、占領工場の操業に努め、進んでは生産力の擴充を計ることは、單に原油の代りに製品又は半製品を積出すことによつて、貧弱なる輸送能力の二〇—三〇%を助けるといふ消極的な意味からばかりではなく、國家百年の大計の基礎として緊急に斷行せねばならぬ所である。

勿論此の計畫の完璧を期するためには、現地における採油、製油機能の發揮の背後において製鐵以下の重工業部門の現地進出も必然的に要求せられるところである。斯くの如き建設的體勢をととのへた後にこそ初めて米英擊滅、百年不敗の堅陣を築きうるのである。

## 第二章 歐洲大戰と石油

### 一、戰時消費量の検討

前大戰勃發の一九一四年に於ける世界石油産額は、五八〇〇萬屯（四億萬バレル）であつたが、一九三九年にはそれが二億九〇〇〇萬屯（二〇億萬バレル）と僅々廿五ヶ年間に五倍の増加を見るに至つた。然も一九一四年當時では僅かに原油の一八%のガソリンを製造し得るに過ぎなかつたものが、今日では四六%のガソリンを製造し得る現狀から見れば、ガソリンに依つて代表される石油の効用なるものは、實に十二倍以上に達して居ると云へる譯である。

今之を吾々の生活に最も手近い自動車について考へて見るに、全世界の自動車數は

一九一四年 約 三〇〇萬臺

一九三九年 約 四・三〇〇萬臺



即ちその増加率は廿五年間に十四倍に達し石油の産額の五倍はおろか、その効用の十二倍以上に増加して居る状態である。石油が近代國家の交通、運輸、生産工業等のあらゆる部門において重大なる役割を演じつゝあることは今更喋々の要もないところであるが、近代機械化戦争においてはその價値は更に重大である。

前大戰に於てすら、聯合軍は石油の波に乗つたればこそ勝利の彼岸に泳ぎつき得たとさへ云はれた。當時は前述の如く自動車の數も少くその馬力も僅少であり、且つ工業の動力化、武器の機械化は漸くその緒についたばかりであつた。自動貨車は輸送に重大なる役割を持つたのであるが、その利用程度は、戦闘部隊に大機動力を與ふる迄には至らず、兵站輸送にも必ずしも決定的能力を發揮したとは云ひ得なかつた。戦車は前大戰の生んだ新武器ではあるが、現在の如く質量ともに強力なるものではなく、飛行機も顯著なる戦闘力を示した事は事實であるがその哨戒、偵察又は攻撃に於ける眞價は、漸くこの數年間に發揮され來つたものである。

現在參戰して居る何れの國も、前大戰に參加せる敵味方の合計數よりも遙かに多くの飛行機を所有して居り、其の種類も哨戒、偵察、輸送、戦闘、雷撃、爆撃等の各種のものを備へて居る。更に各兵種は完全なる機械化によつてその戦闘力を増強しつゝあり、廿五年前の艦船は尙ほその動力源を石炭に依存して居つたのであるが、現在では液體燃料をもつて之に代へるに至つた。

従つて近代戦においては、開戦劈頭より石油の消費が、平時の需要量を遙かに突破して増加するのであるが、これは一九一四年當時の常識では到底測りがたい飛躍的數量である。即ち石油は戦争の結果に對する決定的因子の一つたるべき重要性を持つに至つたのである。

戦時石油の消費中、特に航空ガソリン、普通ガソリン、燃料重油、デイズルオイル又はガスオイル、及び潤滑油の五種類は特にその消費量が大きいであるが、就中ガソリンの量はその第一位にあり、デイズルオイルの消費量もエンジンの發達と共に増加しつゝあり、特に獨逸にあつてはデイズルオイルの増加率はガソリンのそれと略々同率に迄達して居る。

重油は艦船に大量に消費せられ、航空ガソリンは飛行機の馬力數増加と、その用途の多方面の故に更に重大なる意義を持つに至つた。潤滑油は燃料油と同様に、モーターの使用に比例し



て消耗せらるゝもの故、その増加量も亦當然顯著なるものがある。

歐洲の危機を前にして、列強の軍備につきあらゆる角度から、種々なる觀察や批判がなされたが、その中に注目し價するものとして佛蘭西のセリニ將軍が一九三八年春に發表せる石油消費量の數字がある。それによれば、一度西部歐洲の列強が戦争の渦中に捲き込まれるや、石油の消費量は合計年六〇〇〇萬乃至七〇〇〇萬屯即ち常時の三八〇〇萬屯の約二倍に達するであらうといふのである。此の數字中には他の諸小國は考慮せられて居らぬ故に、現實の戦争ではその消費量は優に常時の二倍半に達するのではないかとさへ見られた。各方面の權威ある計算も戦時消費量が平時の二倍に達すべしとの點に於ては一致して居る。

現に獨逸における一九三八年春の統計によれば、一度開戦に至れば石油の所要量は平時の五五〇萬屯より一・二五〇萬屯に飛躍すべく、その増加分の過半は一五〇萬屯のガソリンを含むダイゼル油であらうと稱せられた。しかもこれは獨逸の完全に機械化せる軍備よりすれば極めて内輪の計算であるとされて居る。即ちその後一年、一九三九年現在のチェッコ、オーストリアを合併せる大獨逸にあつては、一・五〇〇萬屯の需要が豫定された位である。

英國は戦争遂行のために常時の一・二五〇萬屯の消費量を更に倍加又はそれ以上を必要とさ

れて居るが、此の場合には彼の生命線たる海上輸送のために消費すべき船舶重油の量が最も重要なのである。従つて他の國と多少趣を異にして、油を求むるために又油を消費せねばならずしかもその量が小さからざる負擔となつて居るのである。

佛國の戦時増加量も之に準じて、最低五〇〇萬屯は豫定されねばならぬ。斯く觀じ來れば、獨、英、佛の三ヶ國が各々如何にその國內需要量を抑壓するとしても、戦時増加分のみでも、英の一・二五〇萬屯、佛の五〇〇萬屯に獨の七五〇萬屯を加ふる時は、實に二・五〇〇萬屯の多量に達するのである。

加之、右三ヶ國以外の近接中立諸國の需要は減退するものとは考へられず、寧ろ軍需生産の多忙のために、一〇—二〇%の増加は當然豫期されねばならぬ。即ち現在の歐洲戦争の繼續は全歐洲に於て平時に對して更に約三〇〇〇萬屯を増求することとなる。全歐洲の平時石油輸入量約三・六〇〇萬屯（第六表参照）と合算すれば六・六〇〇萬屯、之に歐洲圈内産油の自己消費を考慮すれば、前提セリニ將軍の云ふ七・〇〇〇萬屯の數字も敢て唐突のものにあらざることが肯けるであらう。



## 二、獨逸の石油對策

然らば全歐洲の石油工業は果して能く此の需要に應じうるであらうか。何處より如何にして此の數量を確保し來るか。是等の國の何れにおいても、大量の産油はなく、ソ聯以外の全歐の産額を合せても尙ほその需要量の一〇%を僅かに超すに過ぎないのである。戦争が莫大なる石油を必要とするにも不拘、その大部分を歐洲以外に依存せざるを得ぬ點から考へて見れば、英國側はその制海權の確保より見て、特に有利なる立場にあるものゝ如くであるが、之に反して獨逸は充分なる數量入手のためには、非常なる困難を感じる次第であつて、開戦直後にあつては、彼の國內貯油が果して何ヶ月の戦闘に耐へ得るや、それによつて戦争の結果も制約せられるであらうと見る者すらあつた。

一九三四年より三八年に至る五ヶ年間に於いて、獨逸の石油消費量は三八〇萬屯より七五〇萬屯に倍加した。此の數字は國産量、輸入量の合計であつて、特に三七—八年中には、此の内から相當量を戦時のために見越し貯油したものが含まれて居た筈であるが、然し又右期間中に

おけるライヒス、オートバアンの建設や軍備擴張等のために消費せられた數量も尠からざることは明白である。

是に對して國內産油量を増加すべく異常の努力をなした結果、一九三四年の三一萬五千屯より三八年の五八萬三千屯にまで達せしめた。加之重視すべきことは、重合油の製産高が三八年現在において一三〇萬屯に及んで居ることである。然し斯くの如く國內供給高の増産に努力せるにも不拘、その數量は全需要量の三四%に過ぎないのである。参考のため一九三八年における供給量を表示すれば左の如くである。

第一表 獨逸石油供給量（一九三八年）

國産	原油	五八〇、〇〇〇 <sup>註</sup>
	重合油	二、〇〇〇、〇〇〇（人石、代燃の推定合計量）
輸入	原油及び抽出油	一、二九八、六〇〇
	ディーゼル燃料油	一、三五七、一〇〇
	ガスオイル	一、四六七、六〇〇
	燃料油	四〇五、七〇〇



潤滑油	三八八、〇〇〇
燈油	一一二、二〇〇
其他	一七、五〇〇
計	七、五三六、七〇〇

同年に於ける國外輸出は、約七三四萬屯の國內消費量を残して一九萬五千屯に及んで居るが、此の數字も重合油の産額が正確を期し難く、且つ原油の輸入中には、幾分の半製品を含むもの故、絶對的數字とは言ひ難い。現在の戦争状態よりすれば、獨逸のアメリカ、東亞よりの輸入は不能の事情にあり、然も是等地域が戦前迄、獨逸の輸入量の九〇%を補給して居たことを想起すれば、五〇〇萬屯より一〇〇〇萬屯に倍增すべき輸入の途を果して何處に求むべきかは、蓋しヒットラー最大の悩みであらねばならなかつた。

次に總輸入高五〇〇萬屯の仕入國別を第二表に示す。

第二表 獨逸の輸入國別數量（一九三八年）

南米	ヴェネズエラ	二、二三三、〇〇〇 <sup>噸</sup>	四五・一%
北米	小	一、一三〇、〇〇〇	二二・六
	計	二、三六三、〇〇〇	四七・七
合衆國	一、一八三、〇〇〇	二三・九	
メキシコ	四三四、〇〇〇	八・八	
小計	一、六一七、〇〇〇	三二・七	
歐洲	ルーマニア	四五〇、〇〇〇	九・一
	ソ聯	七九、〇〇〇	一・五
	小計	五二九、〇〇〇	一〇・六
アジア	ア	一八八、〇〇〇	三・八
	イ	一五八、〇〇〇	三・二
	蘭	一五八、〇〇〇	三・二
	小計	三四六、〇〇〇	七・〇

註、南領西印度ヨリノ製品ヲ含ム



其 他 一五〇、〇〇〇 二・〇  
 總 計 五、〇〇五、〇〇〇 一〇〇・〇

開戦後右の數量が更に増求せられたることは疑ひなく、第一次獨羅通商協定（一九三九年春）に於てはルーマニアの對獨輸出總額中の二五％は石油の占むるところと定められたが、幾何もなくそれは四〇％に迄達したのである。開戦後の石油需要の激増に對して獨逸のなし得る對策としてはルーマニア壓迫の一途のみであつたが、ルーマニアは此の外に佛國とも通商協定に依りて相當量の輸出を約束して居た。英佛共にルーマニアの石油に對しては現金決済なるも、獨逸は諸機械其の他の物資に依りて支拂ふことを申出たのであるが、然し之は實際上困難にして現金決済の確實性に及ばざること遠い。然もルーマニアの石油業の約七〇％以上は英佛の資本に依り支配されて居たので、獨逸の要求に全面的に應じ得る迄には多大の困難が存したのである。ルーマニアの中立堅持の方針に依れば英佛の脅迫又は誘惑にも拘らず双方國に均等の賣却を考へて居たのであらうが、獨逸は約三〇〇萬屯の要求を以てルーマニアに迫り、以て英國の策動を封ぜんとした。

第三表 ルーマニアの石油情勢（一九三八年）

原油	六、六〇三、〇〇〇屯
原油輸出	三七二、〇〇〇
精製高	六、〇八〇、〇〇〇
國內消費	一、七〇〇、〇〇〇
輸出	四、一六七、九九四
右内譯	一、五八六、三六〇
ガソリン	九一七、六〇五
燃料油	八二七、〇八四
燈油	七六三、三六九
ガスオイル	四〇、五八〇
潤滑油	三二、九九六
其他	

獨ソの中立通商協定の成立に依り獨逸はソ聯よりの石油輸入に期待する所大なるものがあつたが其の輸入経路は黒海、ダニュープを溯つて更に輸送力貧弱なる鐵路を利用しなければなら



ぬ。ダニューブは恐らく唯一の主要輸送路となるであらうが、ソ聯の輸出は此の數年漸減しつつあり、就中獨逸の欲するガソリン、ガスオイルに於て其れが著しく獨逸の希望量の輸入は困難視された所である。

獨逸國內の一九三八年の産油量は五五萬二千屯である。然して此年、オストマルク王國（舊オーストリア）を合併して六萬三千屯餘の原油を獲得し、更にチェコスロヴァキアより約二萬屯を得た。即ち大獨逸としては六三萬五千屯の産油と云ふことになる。更にポーランドのドロホヴィツツの産油はソ聯に獲得されたが、尙殘餘の多少は獨逸の得るところとなつたが故に、之等を考慮に入れれば獨逸の總確保量は約七〇萬屯、之にルーマニアより最大限二〇〇萬屯、ソ聯よりの五〇萬屯を合せて三二〇萬屯、更に國產人造石油、代用燃料を前表に依り二〇〇萬屯と假定すれば合計五二〇萬屯、即ち戦前供給量の七四％を確保し得るものと開戦當初には推定されたのである。

（註）尤も此の推定直後、對ソ電撃戦に依りて五〇萬屯の輸入量を失つたが、それと同時に又ポーランドの全産油量五〇萬屯を得て之を埋め合せ、更にルーマニアの六〇〇萬屯全部をも合せて總計九〇〇萬屯以上を確保するに至つたのであるが、そこに至る迄の

経過を少時、ルーマニアよりの輸入量二〇〇萬屯に基準を置いて検討を續けることとする。

伊太利を通じて獨逸に大量の輸入が可能なるや否やに就いては伊太利自身石油を有せず、其の需要量の九〇％を國外に仰ぎ居ることを想起しなければならぬ。戦争の進展に伴ひ英國は獨逸周邊の諸國の石油供給を嚴重に制限して敵國への流入を防止するに努めて居る。況んや地中海の制海權を握る英國としては、伊太利を通じて獨逸に石油の流入するのを黙視して居る筈はないのである。

石炭、礫炭よりする人造石油の製造高が獨逸に於て幾何なるやは不明であるが、戦争資材の各方面に於ける需要増大に伴ひ此方の生産も相當制限の止むなきに至ることは考へられる。人造石油の原料油を造ることすら相當の難事なる上に其の陸上輸送も亦重大問題である。（國內物資の移動を、主として限りある鐵路に依らねばならぬと云ふことは國防上の弱點である）其の上人造石油工場の位置は西部ライン地方の敵國よりの爆撃圈内に曝されて居るではないか。

（註）一九四〇年十一月、英國情報省は獨逸國內の石油精製並びに人造石油設備の九〇％



が英國の爆撃目標とせられ、八〇%は操業不能又は著しき能率低下を餘儀なくされたと發表して居る。固より之れは英國側が多分に自國の爆撃被害に對する自慰的辯護を目的とした所のデマであることは、其後半歳にして獨逸があつたソ聯電撃戰の大行動を起したことに依つても明白ではあるが、何れにせよ或程度の損害が獨逸の精油、人石設備に加へられて居ることは否定しがたい所である。

輸入を最大限に見て、然も人造石油の増産、保有及び代燃の使用、消費規正等を考へても、尙現實の供給量五二〇萬屯と、戰時必要量の間には少くとも五〇〇萬屯の不足があつた譯である。

之に對して戰時保有が割當てらるゝであらうが、之は精々六乃至九ヶ月しか續かないものと推定された。他の物資でも同様であるが、特に石油に於ては獨逸が所謂ブリッツ、クリーグを必要とした所以である。

佛國の唯一の國內産油はベシエロンの七萬屯（一九三八年）に過ぎず同年の輸入は次の通りである。

第四表 佛國輸入量（一九三八年）

原 油	六、九六八、七〇〇 吨
モーターオイル	五三〇、〇〇〇
燃 料 油	四〇四、一五〇
ガスオイル	九四、九四〇
潤 滑 油	六九、八一〇
計	八、〇六七、六〇〇
國 産	七二、一〇六
合 計	八、一三九、七〇六

輸入先は主としてイラクであつて、約三〇〇萬屯を供給して居る。次に米國より二〇〇乃至二五〇萬屯である。然して米國及びブルーマニアは製品の主要供給國である。地中海が安全なる限り佛國はイラクに依存する所大なるものがあつたが、イラクの數量的増大は之以上は困難であつた。従つて戰爭に依る増加量は西半球に求めなければならぬ。殊に地中海が不安となる時は全面的に大西洋を越へて求むべく對策を講じて居たのであるが、獨逸に降服したる今日之も



空しき計畫となり了せた。

過去十ヶ年間（一九三〇—三九年）に於て佛國の製油設備の擴張は輸入の様態に變化を與へた。即ち前掲の表の如く原油の輸入量は總需要量の九五%に達して居たのであるが、今日となつては、此の精製能力の過半は操業不能のまま、空しく獨軍の管理下に眠つて居る状態である。

### 三、米英の需給問題

スコットランドの小規模のオイル・シェールより以外自國に石油を産しない英國は廣範圍よりそれを輸入して居る。即ち第五表は一九三八年に於ける輸入状態を示す。

第五表 英國の石油輸入國別數量（一九三八年）

南 米	八四九、四三〇	六・八
ヴェネズエラ	四、九六〇、〇〇〇	四〇・〇%
西 印 度	八四九、四三〇	六・八
トリニダット		

ベ ー ル ー ン	八九、二八五	〇・七
小 計	五、八九八、七一五	四七・五
北 米		
合 衆 國	二、二九五、〇〇〇	一八・五
メ キ シ コ	二二一、八五七	一・八
小 計	二、五一六、八五七	二〇・三
南米及北米累計	八、四一五、五七二	六七・八
地 中 海		
イ ラ ク	五七九、七一四	四・六
ルーマニア	四二一、〇〇〇	三・四
ソ 聯	三二六、一四二	二・六
小 計	一、三二六、八五六	一〇・六
東 亞		
イ ラ ン	二、五五八、五七一	二〇・六



蘭	九七、二八五	〇・七
小計	一一、六五五、八五六	一一・三
其他	六九五、六一七	
總計	一三、〇九三、九〇一	一〇〇・〇

(註) 右表に於てイラクは、ルーマニアとソ聯と共に含まれて居るが、之は地中海を經由する故であり、ヴェネズエラと西印度を同一欄にしたのは双方共アルバ、クラカウで精製されて居たためである。トリニダットは輸送の範疇から南米に包含したものである。

右表に見る如く南米カリビヤ地域は英國の最も重要供給源である。次にはイラン、合衆國であり、地中海に依るものは僅かに一〇%に過ぎず従つてこの程度のもものは喜望峰經由でも輸送可能であるとされた。即ち假に地中海の安全性が失はれても英國はその大輸送力に依つて悠々喜望峰を經由して西部アジアの石油を輸入し得ると信じて居たのであるが、帝國の印度洋進出に依りて此の航路すらも保證困難の状態となりつゝある。

英國が戦時増加分に就いては合衆國より求むることは當然であつて、米國も亦極力其の要求を満たすべく萬全の對策を講じて居る筈であるが、最も内輪に見ても交戰國獨佛英の石油消費増加量は戦前の輸入量二、四〇〇萬屯の二倍となる。前述の如く獨佛は之を大西洋方面より得る事困難なるに對し英國は此の地域に依りて其の要求を満たし得ると考へられた。

依つて獨佛の要求量を前記の數量から差引くならば、英國は更に一・二五〇萬屯を戦時増加量として必要とする譯である。此の要求に應ずるためには日産三〇萬バレルの設備を動員せねばならぬ。即ち此の需要量は主としてガソリン、燃料油故、之を原油に換算すれば更に其の量は二一三〇%方増加するからである。

其の増大量も合衆國內の日産能力三四〇萬バレルを更に一割だけ引上げることによつて容易に満たされるであらう。實に合衆國こそ此特殊需要に應ずべき準備を有するものであつて、ヴェネズエラのみでも日産五萬バレルの能力を直ぐにも倍加出来る状態である。コロンビヤも亦五萬バレルを増加し得る。之は北米の他の地域に於ても同様であつて、パイプラインの發達と相俟つて其の潛勢力は大なるものがある。即ち合衆國のみで七五%を供給し得るとせば他の二五%も亦北アメリカのみで供給すべき机上の計算は可能である。

米國が直接戦争の渦中に捲き込まると否とに不拘、其の對英援助政策を續くる限りは大西



洋を越へて英國への輸出は飛躍的に増加せざるを得ないのである。

英國の制海權の維持のためにも其の石油の増加量は大きくなるべく此の點に於て果して合衆國が全部其の要求に應じ得るや否や多少の不安なきを得ない。即ち合衆國の一九三九年九月一日の燃料油の貯藏量は多少増加して一・六七二萬屯であるが、此の中の七〇%以上は西部加州に在り、中部及び東部の原油は西部の其れに比して輕質であるが故に、大部分はガソリンに製せられて燃料油となるものは僅かである。即ち以前の東部の工業地帯への燃料油は主としてヴェネズエラの重質油より求められたのであるが、關稅の改正に依つて其の大部分は西印度で製造されて合衆國に入らず、歐洲に渡るに至つた。即ち英國にとつても燃料油をヴェネズエラ、西印度に仰ぐことは自然的であつて事實過去數年間其の輸入の四〇—五〇%は此の方面より入れられたものである。北米合衆國は特に東部の燃料油不足に對しては多少經濟的犠牲を拂つても、ガソリンの抽出を控へてその補給を計らねばならぬとさへ焦慮されて居る状態である。

第六表 英國品別輸入數量 (一九三八年)

原 油	二、三二八、〇〇〇
モーターオイル	五、九六九、三八一

燈 油	八三六、六五〇
潤 滑 油	四一一、五七五
ガソイル	六六六、〇〇〇
燃 料 油	二、七六五、五〇〇
其 他	九六、八五七
計	一三、〇六三、九六三

燃料油の供給源には此の他メキシコがある。以前は大量の燃料油が英國へ輸出されたが、一九三八年カルデナス大統領に依り其の輸出を止められて反對に獨伊に向けられた。然し此の變態的供給もカルデナスの失脚により再び逆轉して今日に至つて居る。

然るに其の後佛蘭西が英國側の戰線より落伍したことに依り石油に關する限りに於ては反樞軸側の消費量はそれだけ輕減された譯ではあるが、今英國の平時輸入量中の大西洋航路に依るものを第五表に依つて見るに、總屯數約八四〇萬屯に達する(六七・八%)。是に戰時需要量の一、二五〇萬屯の大部分を合して大約二、〇〇〇萬屯の石油を米洲に依存せねばならぬ。國內消費規正を如何に強化するとしても、一方にはソ聯、ルーマニアより輸入せる五〇萬屯を失



つて居る故に此の二、〇〇〇萬屯の負擔には何等の貢獻をなし得ない所である。

即ちチャーチルが恥も外聞もなく媚態の限りを盡して米國に依存する所以である。米國も亦是に對して常規を逸脱せる援助の計畫を立て、居るのである。

アメリカは一昨年末大西洋に於ける航洋タンカー五〇隻の徵發を國防局の名に於て斷行して以て對英石油輸送に當らしめんとした。然し乍ら此の五〇隻（五〇萬噸）のタンカーは、それ迄決して繋船又は不急の任務に就航して居たものではなく、ガルフコーストの生産地より東海岸の消費地へ毎日不斷の輸送に任じて居たものである。此のガルフコーストより東海岸の消費地域には一日平均一八萬三千屯の石油がタンカーに依つて運ばれて居たものであり、且つ此の數量は東部へ送られる全石油の九五%を占め、一萬噸級より三—四千噸級約三〇〇隻のタンカーが此の輸送に當つて居たのである。是等の中平均二〇%の入渠を計算に入れる時は、殘餘の船舶中より特に優秀なる航洋タンカー五〇萬噸を徵用せられたことは、實に合衆國東海岸地域の石油供給に對し重大なる支障を及ぼすに至るのである。

それがために或は大型艇の大量建造、又はタンクカーの利用又はパイプラインの増設等に依つて之れが緩和策に狂奔して居る状態であるが、アメリカ式準備を以てしては徒らに机上論の

みに走つて効果の見るべきものなく、國內石油の局地的偏在並びに缺乏は今や國防上の弱點たらんとしつゝある状態である。即ち西海岸に於ける燃料重油の過剩、ガルフコースト一帯に於ける油槽の滿腹状態のみにても戦時生産擴充に寧ろ障礙となりつゝあるに加へて、重要な戦時重工業地帯たる東海岸に於けるガソリン、特に重油の配給の不圓滑は大西洋海上權の維持と思ひ合する時、合衆國すらが戦時石油問題の苦痛を嘗めつゝありと稱して差支なき状態に立ち至つた。此のアメリカの犠牲に於て、然しながら尙充分の石油が英國に送られつゝあるかと云ふに、獨逸の海上封鎖は全大西洋に其の威力を張り、開戦後敵國側のタンカーの撃沈せらるゝものは枚擧に遑なき状態である。現に米國參戰以降三月中旬迄に、西印度諸島水域に於て撃沈せられたる敵國商船百五十一隻一〇三萬噸の中、五十八隻四四萬噸は油槽船である。

考へ様によりては合衆國は敢て樞軸潜水艦の標的として次々に虎の子のタンカーを提供して居るとも云へるのである。戦前英國の輸入量の五〇%近くを供給して居たヴェネズエラ政府は最近の頻々たる油槽船撃沈に恐れ、十數隻の英國向けタンカーに對して至急歸港方を指令したと報ぜられて居る。かくては英國の石油供給も決して順調であり得ず、今や獨逸の對英逆封鎖は愈々其の効果を發揮しつゝあると云へるのである。即ち二、〇〇〇萬屯に達する石油の果し



て何割が大西洋上の獨逸の攻撃を免れて無事英國に運ばれ得るや、一度び撃沈せられたる時はその損失は單に積載の油のみではない。その船が今後共保證すべき輸送能力の完全消滅を意味するのである。こゝに至つて敵の脅威に曝されたる大西洋ルートに依る英國の石油補給の問題は歐洲の陸上地域のみならず於て解決せんとする獨伊のそれよりも遙かに不安にして困難なるものと考へられて來るのである。

第七表 世界原油移動一覽表 (一九三八年)

輸出國		(單位 〓 一、〇〇〇 噸)
南米	ヴェネズエラ	二四、〇〇〇
	コロンビア	二二、二九一
	ペルー	一、九三〇
北米	計	二八、二二一
合衆國	(輸入を差引したる正味)	八、四四〇
	メキシコ	三、五〇〇
	計	一一、九四〇

歐洲		ソ	計
ルーマニア	六、六七一		
聯	二、三四六		
アジ	九、〇一七		
イ	六、六五四		
イ	三、七五一		
ラ	五、一六〇		
ク	一五、五六五		
印	六四、七四三		
蘭	計		
計	(單位 〓 一、〇〇〇 噸)		
總	九、八二〇		
輸入	二、九六六		
國	二七、〇〇〇		
北	一、七六四		
米	一、〇七八		
南	計		
米	三六、五二一		
歐			
西			
歐			
バルチック諸國			
中			
歐			



地中海域	六、六七九
印度及びアフリカ東部	三、〇二六
他のアジア	七、七四三
アフリカ西部	六七三
濠洲	一、五〇四
其他	二、五〇〇
總計	六四、七四三

此の大西洋ルート不安は、とりもなほさず英國側に窒息死の暗影を投げかけるものであると同時に、又米國にとつては帝國海軍の西海岸封鎖と相俟つてその孤島化を意味する。この場合こと石油に關する限りは米洲南北を合して四、〇〇〇萬屯（第七表参照）に達する輸移出の途が全く閉塞さるゝことになる結果、如何にルーズヴェルトの妄想的尨大豫算による國內戰時産業の多忙が續かうとも、又如何に軍直接の消費量が増大しやうとも、必ずや局部的に偏在過剩又は不足缺亡の惱みを生じ、その貯油にその輸送に重大なる破綻を曝露して、遂には經濟不安を醸し出だす酵素たるべき危険なしとは保證しがたい。

意義の輕重、數字の大小こそあれ、これと同様の現象は現在の重慶政府における桐油、タングステン等に見ることが出来る。國內に需要の餘地なく貯藏の見込みも立たず、さればとて輸出の途も断たれたる過剩物資は、特に戰時にありてはその價值無にも劣るであらう。

假りに一步を譲つて國內的影響を不問に附するとしても、東西大西、太平の兩洋より挾撃せられつゝあるアメリカは、すでに英、蘭、濠等を積極的に援け得ざるまでに追ひ込められて孤島化せんとする現在では、悉しこれ迄の觸れ込みが大袈裟であつたゞけに、恰も販賣不能の在庫品を抱きかゝへながら不渡手形で責められて居る朦朧會社の如き觀があるではないか。何れにせよ、世界にその價値を誇り來たつたアメリカの石油も、樞軸側の海上封鎖によつて愈々輸出不能となるならば、然して彼自身積極的攻勢に出づるだけの準備もなしとするならば結局は戰爭に役立ち得ざる無價値の液體でしかないのである。

#### 四、樞軸國と極西アジア油田

一九四〇年末迄には交戰國の何れも石油の缺乏に依りて其の軍事行動を阻害される迄には至



つて居なかつた。各國とも此の日のために準備保有に努めて來たのであつて、其の量質に至つては國防上の秘密として窺知を許さないが、大體六ヶ月程度の軍事行動に對する量は確保して居たと見るべく、又何れの國も更に其の貯藏量の増大に努力はして來た筈である。

戦争が短期間に終れば石油に依る影響もさして重大となつて現はれず済んだであらうが、然し此の戦争は長期戦であり、消耗戦である。此の場合武器、彈藥と共に食料と石油とをより長期に涉つて確保することが何よりも急務と云はねばならぬ。

前述の如く其後の歐洲情勢は豫想を超へた大變化を生じた。即ち佛國は一敗地に塗れて獨逸に屈服せしめられ、獨逸待望のルーマニア油田は英國の必死の工作にも拘らず遂に獨逸の獲得する所となつた。かくて六六〇萬屯の石油は獨逸の交戦力に絶大なる貢獻をなすことになつたのであるが、他面獨逸は東部に於てソ聯との一時的友好關係も空しくこゝに世紀の血闘を見るに至つたのである。

假令獨逸が全ルーマニアの石油を獲得し、ポーランドの五〇萬屯をも併せ得たりとするも、此の全歐に擴大せる戦線のためには更により多くの石油を必要として來たのである。然も英國を打倒せむためにはソ聯は結局は後門の狼であつた。ヒットラーが中立條約に依るソ聯よりの

石油、食料の入手を犠牲にしてまで決然矛を翻してソ聯を電撃せる所以である。

然しながら要するに獨逸の目的とする所は一九四一年の秋迄にウクライナの穀倉を確保し、進んでコーカサス油田を狙ふ一方、トルコを押へてイラク油田を英國の地中海勢力より絶縁せしむることに存したのである。限りなく擴大する戦線には又限りなき石油が必要である。自ら之を獲得すると共に敵の供給路をも断たねばならぬ。ヒットラーのソ聯電撃は實に此の乾坤一擲生死の血路を開くべき唯一の途であつたと云へやう。

敢て生死の血路と云ふ、ヒットラーがソ聯電撃に當り、一九四一年の冬以前に是を完了すべき計畫であつたことは彼の聲明にも明かである。此の期限付きの所以はヒットラーがそれ以上の石油の準備に不安を有したからに他ならぬ。

第八表 歐洲産油額 (一九三八年)

國別	單位	噸
ルーマニア	一、〇〇〇	六、六〇〇
ポーランド		五五〇
獨逸		五五〇



オーストリア	六〇
チエコ	二〇
フランス	七〇
イタリア	一五
アルバニア	六五
ハンガリー	四〇
計	七、九七〇

即ち假令ルーマニアの六六〇萬屯、ポーランドの五〇萬屯、其他の三〇萬屯を獲得せりとは云へ、自己の六〇萬屯に人造石油の一三〇—一五〇萬屯を合せても尙ほ總計一、〇〇〇萬屯に達しない。之を以て伊太利を含めたる全歐より北阿に及ぶ樞軸國軍の需要量を何人がよく賄ひ得るや。敢てその戰時需要量を示さずとも英國を除く西歐、バルチック、中歐及び地中海域即ち現在戰禍の中にある是等の地域に於て戰前一九三八年の輸入量が實に二、三五二萬屯に達して居る（第六表、第七表参照）事實を想起すれば充分である。

獨逸の壓力がルーマニアに對して加へられた時の、又ギリシア進撃前後トルコに對しての英

國の對策が如何に必死であつたかは、イーデン等の狂奔に依りて世界周知の事實である。ルーマニア油田の爭奪、トルコを壓迫することに依るイラク進出及びコーカサスへの脅威、之が彼等の戰爭の前提でもあり又條件でもあつたと云へやう。獨逸が昨年十月迄にソ聯を屈服せしめんとした計畫も空しく、冬籠りに入つたことに就いて獨當局は猛烈なる雪と寒氣のためと發表し零下四〇度の戰線では油が凍つてタンクも動かぬと説明して居るが、凝固點マイナス四〇度以上の潤滑油なくしては冬季モスクワ攻略は困難である。北滿の高度六〇〇〇米、オールドスの嚴寒季に於ける皇軍は果して如何に戰つて居るか、獨逸の冬季攻撃中止の原因が油の凍結にあらずして涸渴でなくんば幸である。

獨逸は此期間春季攻勢のために必死の貯油をなしつゝあるのではあらうが、何れにせよ彼に尙充分の油ありとは到底考へられぬことである。伊太利の状態は事石油に關する限り更に樂觀を許さぬものがある。國內に全く産出なく、然も前年エチオピア攻略に際しては國際聯盟より經濟封鎖の制裁を加へられ、其の後恢復の遠なく充分の貯油なきまゝに參戰するに至つたものである。伊太利軍が兎角振はず特にエチオピアの失陥、タラント港の爆撃以後は其の戰果に見るべきものなく、僅かに獨逸軍と協力するか、乃至は小艦艇に依るゲリラ戰のみに終止しつゝ



ある事實は必ずしも伊太利軍弱きが故ではなく、寧ろ石油の缺乏が根本的原因なのではあるまいか。實に伊太利の大軍の機動を聞かず、大艦隊の出動を見ないままに歲月は空しく経過して居るが、此の原因が石油に存するに非らず、唯戰略上の駆引きであるならば幸甚である。

何れにせよ樞軸軍がコーカサスを押へ、イラクを確保するに非ざれば地中海の英國勢力を撃碎する事は不可能と稱せらるゝ今日、次に來るべき攻撃目標は既に明かなりと云へやう。然しそれにしても其の作戰のためにも既に莫大の石油が必要である。此の困難を彼等は如何にして克服すべきか。

#### 四、結 論

是に至れば大東亞戰爭勃發後僅か三ヶ月にして米英の東亞侵略據點の盡くを覆滅し、石油を初めとする重要資源地帯を確保して百年不敗の體勢を整へ得たる帝國に對し、ヒットラーが、ムッソリーニが感謝感激を表明せる事實は單に其の運命を互ひに委ね合つた樞軸の一國家が、一地域に於ける勝利を祝福せると云ふが如き單純なる意味のものではないことが容易に理解さ

れるであらう。

即ち獨伊以下の歐洲樞軸諸國は吾が帝國が築き得たる絶對不敗の陣容を以て、今後更に東にハワイ、カリフォルニアを襲ふてアメリカを孤島化せしむる傍ら、西は印度洋を席捲して極西アジアに進出し、イラク、イランの油田を把握し以て彼等との連絡を可能ならしむべき日を鶴首して待望して居ると考へられるのである。然して此の進出こそは日獨伊樞軸の東西よりする鐵鎖の連環を意味するものであり、東亞、蘭印、西部アジア及びコーカサスの全油田地帯を確保して以て亞歐の天地より米英勢力を完全に驅逐し去ることを意味するものである。此の體勢成つてこそ初めて大英帝國崩壊の日が、更には傲慢ルーズヴェルトをしてホワイト・ハウスに城下の盟をなさしむべき日が確實に豫見されて來るのである。

實に南方の石油を確保してこそ帝國は百年不敗の陣容を固め得るのである。今や一死盡忠の一億の火の玉が金剛不壞の軍備を以て石油の波に乗らんとして居る。此の一戦をこそ世界最終戦たらしむべき永遠の勝利者の榮冠は石油を確保したる帝國の上に輝くであらう。



昭和十七年三月二十七日 印刷  
昭和十七年四月一日 發行

非賣品

東京市大森區田園調布四丁目十九番地  
編纂兼 發行者 石崎重郎

東京市京橋區銀座西一丁目七番地  
印刷所 福神製本印刷所

東京市京橋區銀座西三丁目一番地  
發行所 大協石油株式會社



423  
522



終